

芙美子論修正:「稲妻」をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7053

芙美子論修正 — 「稲妻」をめぐつて —

森 英一

以前、小著『林芙美子の形成』（一九九二年五月 有精堂刊）を著したが、その後記述の誤りに気がついた。遅まきながらこの機会に訂正したい。それは「稲妻」をめぐるもので、同書一六〇ページの次の部分である。

その初刊は『純粹小説全集第六卷』（昭11・12刊 有光社）である。これに「蝶々館」や「青春賦」等々と一緒に所収されたのである。この初刊本をテキスト(B)と称する。

以下、雑誌所収のテキスト(A)とこの(B)との本文異同を巡る問題に触れているのだが、何を勘違いしたのか初刊本を『純粹小説全集第六卷』と記してしまった。しかし、正しくは、『林芙美子長編小説集 第二卷』（昭十三・九・十六 中央公論社刊）と述べるべきであった。改訂版を出すこともなく、現在に至ってしまっただが、とりあえずは、小著をご利用の際は、(B)をそのように読み換えて

いただければ幸甚である。

この誤りはそれとして、現在でも「稲妻」をめぐつての基本的考えにかわりはない。

※

ただ、この機会に小著で触れる事が出来なかった点について改めて述べてみたい。まず「稲妻」をめぐる書誌的事項を整理してみる。

- (一) 昭和十一年一月〜九月（但し、八月号を除く）『文藝』
- (二) 『純粹小説全集第六卷』（昭十一・十二・十八 有光社）
- (三) 『林芙美子長編小説集第三卷』（昭十三・九・十六 中央公論社）
- (四) 『稲妻』（昭二十一・五・三十 飛鳥書店）
- (五) 『林芙美子全集第五卷』（昭二十七・四・二十八 新潮社）

これらの中で、(一)と(二)の本文は同じだが(一)は巻末を(余末)で閉じているのに対して、(二)は(余前章終)として終了しているのが注目される。両者間に本文の異同が見られないので、おそらく美美子は(二)の後に(後章)を書き始める積りだったのである。それが「稲妻―後章(一)―」(昭十二・二『文学界』)である。ただ、その後何らかの事情でその続きを誌上で完成させることが出来なかった。

そこへ、(三)の企画があり、(二)のままを良しとしなかった美美子は書きかけの「稲妻―後章(一)―」を脇において、(二)に加除訂正をすることによって、一応の完成を図る道を選択したのではないかと推定される。それが(三)だ。

小著でも指摘したように(三)は(一)(二)の約十二%分が増えている。それだけではない。文章の添削もかなり念入りに行っている。例えば、

何も言ふことがないので、少時く二人は黙つてゐたが、朝から陰気な空あひで、雪の前触れのやうに雷が殷々と鳴り始めた。

(略)

二人はまた黙つてしまつた。柱時計がほんほんどと湿つた音をたてて鳴つてゐる。障子の腰硝子から四坪ばかりの小さい中庭が見え、埃をかぶつた八つ手の(略)。

冒頭の数行から引くこの例から知れるように念が入っている(――部は加除をさす)。

ところで、(三)に「創作ノート」が付されたが、そこで次のように述べる。

これは「文藝」に何年もつづけたい意欲でとりか、つたのだけれど、途中から力弱くなつてしまつた。(略) 鳥合の衆と云ふすてきれない幼い民衆のなかにも、こんな生涯があると云ふことを書きたかつた。

ここで述べるように美美子は当初の意図から後退したけれども作品はそれなりに完成したことを認めている。従つて、これを初刊本と判断する。

(四)は(三)とほぼ同一の本文だが、ラストの(暗い空に、細い稲妻が一筋一筋の早さで遠く走つて行つてゐる。)の(細い)が(白い)に直されているのは、注目すべきであろう。言うまでもなく、この方が情景が強く印象付けられるからである。

また、これにも「稲妻に就いてのノート」という一文が付されている。しかし、その内容は(三)のそれとほぼ同一である。

(五)は(四)の本文を受け継ぐが、(六)は(一)と不足分を(四)以下から補つという不思議な本文を採用する。

以上の検討から知られるように、作者は生前、その欲求に従つて何度もこの作品に手を入れている。その結果、我々は幾種類も

のテキストを持つことになった。しかし、それはそれとして、読者にとっては作品のその後の展開についてはやはり気になるところである。

例えば、綱吉の子を縫子はどうするつもりなのか。清子と国宗の関係はどのように進展するのか。満州へ渡った嘉助はどうなるのか。何よりも、光子、縫子、清子の三姉妹の将来は？母せいは三人の娘達と暮らせるのか、等々。これらの行方を示すとしたら、現在我々が手にするテキストに倍する量が必要とするだろう。しかし、作者はそれを生まなかつた。

その代わり、作者は全てを稲妻と共に断ち切つて読者に委任する形で『稲妻』を完成させたのである。そこに彼女が自然主義文学者・徳田秋声の紛れもない弟子である事を知る（小著『秋声から美美子へ』一九九〇年十月 能登印刷・出版部）。我々は与えられたテキストを受け止めるしかない。（本学教員）